

多摩デポホ通信 第3号

NPO共同保存図書館・多摩

調布市深大寺北町一―三二―一八

2007年7月31日発行

●depo_tama@yahoo.co.jp

●郵便振替 00170-8 - 610534

●HP / http://www.geocities.jp/depo_tama

ビッグニュース!

館長協議会が申請していた
研究助成費として、市長会
から500万円つく!

今年度いっぱい、コンサル
に調査を委託

多摩地域の広域連携事業と
しての位置づけを獲得

東京都市町村立図書館長協
議会が6月に東京都市長会に
申請していた「共同保管・共
同利用」事業の調査・研究費
が認められました。これは昨

成18年2月に報告書「多摩地
域『共同利用図書館』の設置
に向けて」として提言されて
いた課題が、これから選定さ
れる調査機関によって検証さ
れていきます。

デポジットライブラリー実
現に向けて、いよいよ行政の
歯車が回り始めました。

NPO法人化へ!

昨年5月に発足した「N P
O共同保存図書館・多摩」は、
満一年を経過しました。この
間、西東京市や日野市の保存
シール貼りをバックアップし
てきました。12月には対話・
交流集会「NPO保存図書
館・多摩を肴に大いに語ろ
う!」を開催しました。

一年を振り返ると、今後の
励みとなることがいくつもあ
りました。二年目に入り、5
月の一周年記念イベントでス
タートを切りました。現在、
会員数は、個人136名と2
団体となっています。

今後は法人格を取得しNP
O法人としての活動を展望し
ます。秋には法人化申請のた
めの集会を予定しています。

津野海太郎理事

「情報は捨てても本はすてる
な!」を『情報の科学と技術』(57
巻4号2007p.180-183)に発表。
Googleの図書館蔵書の電子化と
東京都立図書館の蔵書大量廃棄
を絡めて資料保存の必要性を訴
えています。

武蔵野市図書交流センター で再活用資料の仕分け作業 が実施されました

共同保存図書館検討
委員会作業部会

1. これまでの経過

平成16～17年度の館長協議会に設置された除籍資料再活用プロジェクトチーム5万冊ワーキンググループが、旧都立図書館除籍再活用資料のうち館長協議会預かりとなっていた5万冊（町田市立図書館で保管、のち武蔵野市立図書館・武蔵野市図書交流センターへ移管）について、市町村立図書館に既に所蔵されているかの重複調査（市民も参加した横断検索システムを使用した「データ検索」）を平成17年7～10月に行いました。こ

の結果約70%（3.5万冊）の資料が多摩地域の図書館に重複所蔵されていると判明しました。

平成17年12月～1月の6日間で、武蔵野市図書交流センターの移管5万冊の資料を、多摩地域既所蔵分と未所蔵分とに分け・箱詰めする作業が市立図書館職員および市民ボランティアの協力を得て完了しました。

平成18年7月、この3.5万冊と同じ資料を所蔵する自治体に対し、資料名を指定したデータを送り、館長協議会保存指定シールの貼付と該当資料の保存を依頼しました。

多摩地域図書館既所蔵分と未所蔵分と仕分けられ箱詰めされた5万冊資料のうち、未所蔵分は選別の上、武蔵野市立図書館で受け入れ保存を行い、重複分は、図書交流セン

ターでの再活用事業の原資とすることになりました。

また、未所蔵資料は、多摩地域での共同利用に備えて、書誌データを作成・付与する予定でしたが積み残しとなっていました。

2. 再び5万冊と対面

このたび武蔵野市立図書館での保存計画の目的が立ったため、館長協議会共同利用図書館検討委員会作業部会が、従来の課題の整理とともにこの作業を引き継ぎました。

武蔵野市立図書館では、多摩地域で所蔵していなかった資料を中心に、1万～1万5千冊の資料を新図書館書庫に収蔵するための準備作業を始めました。

また、図書交流センターでの再活用資料のリサイクルを

前に、まだ市町村立図書館で再活用できる資料が眠っている可能性が大であることから、最初に市町村で再活用できる資料を抜き出し、その後でリサイクル事業を行う計画を立てました。

まず保存対象資料の管理をお願いしてきた図書交流センターのご尽力で、約2万1千冊の資料がリスト順に作業室に配架され、現物選定が行える状態にしてもらいました。

市町村の資料選定担当者による引き抜き作業に当っては、その後の保管資料の管理のため、通し番号の付与や保存シールの貼付など、若干の準備が必要です。この準備作業および資料選定担当者による引き抜き作業を7月12日に実施しました。各市から応援を要請し、当日は18自治体21名の職員と多摩デポ会員6名

の計27名が集まり、予定作業をやり終えました。

3. 今後の予定

今回の引き抜き作業は、一旦箱詰めしていた資料の開箱や配架作業を、図書センターのご好意で進めることができましたが、予定の全冊の作業量を考慮すると、あと2回、同様の作業を繰り返す行うことが必要です。

2回目は、本年秋ごろに実施する予定です。今回の作業で残された多摩地域未所蔵資料および多摩地域で1自治体でしか所蔵がなかった資料を箱詰めして分別保管する作業、そして0類と3類の資料約1万冊を箱開けしてリスト順に配架する作業で丸1日かかります。その後で、今回と同様の通し番号付与作業の参加要

請と、選書担当者の派遣をお願いすることになります。その際は、「多摩デポ」の皆さんにお手伝いいただく予定です。第3回は、平成20年度春以降が見込まれます。

また、時期については未定ですが、武蔵野市立図書館収蔵資料へのデータ付与作業についても検討中です。予定では、図書交流センターをお借りしてインターネットからデータを検索して入力する作業を、皆さんにお手伝いいただくことを考えています。

4. 作業部会の次の目標

館長協議会共同利用図書館検討委員会が市長会に申請していただきました広域連携活動に対する助成制度について、申請が受理されました。市長会では調査・研究費用として50万

円の予算が決定されました。7月18日の館長協議会定例会で承認されたばかりです。館長協議会では、まもなく事業者との契約に入っていく予定です。

これに伴い、検討委員会の下部組織である作業部会が、契約事業者との打合せや除籍データを含む各種調査の準備報告書完成までの調整機能を担うこととなるはずです。来年3月末の完成を目指す調査報告書に関する事業は、慌しく動き出します。

(文責・中川恭二)

(今回の作業の実際については、準備段階からいろいろと工夫していただいた図書交流センター職員の木谷真貴さん、当日ボランティア参加してくれた二人の会員の声をお読み下さい。――編集子)

図書交流センターでの準備作業報告

木谷真貴

町田市から千5百箱の段ボール箱が運び込まれ、5万冊の本が「保存」と「非保存」に分けられ再び箱詰めされたのは、05年暮れと翌1月でした。作業終了後、当センターには再び千5百箱のダンボールが積み上げられて残り残りました。

06年春、武蔵野市で活用しやすそうな4門から7門の非保存資料を、箱から出して配架してみました。07年に入り、建設予定の新図書館で活用できるものがあるのでは、と7門の保存対象資料も箱から出しました。その際リストと照らし合わせてみると、非保存資料の中から見つかる不明図書が少なからずあることに気

づきました。非保存資料は、いずれ市民リサイクルに当てる予定ですので、保存資料が混じったままで放出してしまつては、取り返しがつきません。保存資料を確定するため、5〜6門も配架しました。当センターは常勤職員2名、アルバイト1名という体制です。他の業務と並行して、少しずつ作業を行いました。こうして並べた1万8千冊ですが、ずっとこのままにはしておけません。データ作成まで再び箱詰めするにしても、せつかく本とリストを一致させたのですから、通し番号を付けてきちんと保存したいと思いました。当センターで寄贈圖書の整理をするときのやり方、番号のついた短冊を一冊一冊に挟みこむという方法を提案し、5月に当センターで開かれた作業部会で検討さ

れ、7月12日という作業日が確定しました。

やつと作業が前進することになり、嬉しいながらも6月は準備に追われました。未開封だった保存対象の4門の配架、1万1千冊分のリスト打ち出しと、番号短冊の作成。短冊は、エクセルを使ってA4用紙に40枚ずつ入るよう調整し、延々と印刷しました。短冊の長さは、本の中に落ち込んでしまわないようA4横(21cm)にしました。印刷が終わると、切り離し作業です。何枚か切ってみるうちに、完全に切り離してしまふと却つて、番号順にまとめておくのが大変だということがわかりました。また、ハサミで1万枚を切り離すのに、1枚当たり何回も手を動かすのは大変です。そこで打ち出した紙を三つ折にして、ハサミ

を入れる回数を少なくして済むようにしました。また短冊の根っこの部分を1cmほど切り残し、40枚の短冊が端でつながったままになるようにしました。(挟む直前に、ちぎつて切り離します)

二回目以降の作業は、箱開け、配架も皆様にやっていただけのことになりました。今回の作業が次へのステップになれたなら良かったと思つています。

資料仕分作業に参加して

麓 常夫

東京都立図書館から除籍された本の一部が町田市立図書館から武蔵野市図書交流センターに移され保管されているとかねてから聞いていたが、今回はじめてその現物をみる

ことが出来た。かつて多くの人々に利用された本が危うく棄てられところを救つた図書館の人達の思いがこもっている本に直接手をふれる機会に恵まれたことに喜びを感じながら作業を開始した。

作業は二人一組となり、午前中は図書交流センターの職員の方が作られた一覧表を見ながらの現物との照合と資料番号が印刷された短冊を本の見返しに挟みこむ単調な作業が続いた。途中の休憩の際、作業の進捗状況はと聞かれたが作業予定の分量を把握せずに作業を始めたため即答が出来る、とりあえず三分の一くらいと答えてしまった。実際には半分は終わっていた。作業が順調だったのはあらかじめ点検を終えていたためだろうか、一覧表と本との不一致はほとんど見られなかった。

昼までに予定された分は終了し、他の組の手伝いに加わる。私の相手は午後、カウンター業務があるとのことで、午前中のみで職場に戻られた。

午後は未処理部分の棚での午前中と同様の作業が続いた。不思議なことに人によって作業の仕方が微妙に違う。どういうやり方が能率的なのかの判断は難しいが、結果としてはそう変わらないのだろう。点検作業が一段落した後は、各市立図書館の職員の方たちは自館で必要な本の選定作業。私は保存シール貼り作業を開始した。この作業も二人一組で、作業の手が止まらない程度に、時折冗談を交えながらの単調作業が続いた。保存シールを貼る意味合いは、「この本は棄てないで下さい」という図書館人の願いがこもっている。シールの貼っ

てある本を手にした人に本を保存する大切さを伝えることなのだろう。さらに、「この本を棄てる者に呪いあれ」の意味もあるというのはいきすぎだろうか。保存シールのことは図書館人ばかりでなく、広く利用者に知ってもらい必要があるのではないだろうか。

ひさしぶりの本と直接接触する作業で、一日があつという間に過ぎた。休憩時間や作業の合間に交わす図書館の人たちとの会話を楽しみながらの充実した一日であった。

今回のような多くの人達が集まり、円滑に作業を進めるためには、その下準備にかなりの時間が割かれているのではないだろうか。図書交流センター、各市立図書館の職員、「共同保存図書館・多摩」の事務局の方々へ感謝したい。

追記

この原稿を書いている最中、柏崎沖を震源とするマグニチュード6.8の地震があった。そのニュースを聞いた時、そこに生活する人達の生死、家屋の被災を心配すると同時に図書館は大丈夫だろうかと思った。マスコミは原子力発電所のことには報道するが、図書館のことはあまり報道しない。新潟に限らず大地震の際には図書館も被害を受ける。

人の生活優先は当然のことだが、本もまた人のつくった大切な財産である。もし図書館の本が失われることがあれば、共同保存図書館にある本を被災地に届けることも活動のひとつとして考えても良いのではないか。もちろん、ただ本を送るだけでなく、図書館再建のために発生する作業を含めてのことだが。(七月十六日)

自転車飛ばして

山領健二

多摩デポの共同作業への参加、私は今回で3度目、1度目は久々の共同労働の体験を楽しみ、2度目は多摩デポの運動の内側に入って働いた気分が家路に着きましたが、今回は手にした都立の除籍本のあれこれや、作業場所の武蔵野市図書交流センターの役割などを考えながら自転車を飛ばして帰宅しました。次回の呼びかけを楽しみに待っています。



「広げよう！共同保存図書館―設立一周年記念・パネルディスカッション」開催される

NPO共同保存図書館の設立一周年記念事業として、5月27日に調布市民プラザのあくろすホールを会場として『広げよう！共同保存図書館―設立一周年記念・パネルディスカッション』を行いました。パネリストには、NHK解説委員の扇谷勉さん、日本図書館協会理事で元国立国会図書館職員の千代正明さん、そして当NPO理事で出版ニュース社社長の清田義昭にお願いしました。

パネルディスカッションに先立ち、市長会の提言『広域連携の勧め』に関する報告と東京都町村立図書館長協議会（以下、館長会という。）の動

きについて町田市立図書館館長の手嶋孝典さんより報告していただきました。その中で市長会が募集している「多摩・島しょ広域連携活動助成事業」に《共同保管・共同利用》事業の調査・研究費》ということで助成申請をすることが報告されています。また、館長会の中にある共同利用図書館検討委員会の作業部会の動きについて、西東京市図書館の中川恭一さんに報告してもらいました。

多摩地域の図書館にとっても、私たちの活動にとっても市長会の提言は大きな意義をもちます。うまく連動した取り組みが行われることを望みたいと思っています。

パネルディスカッションでは、まず三人のパネリストの方々から共同保存図書館に対するご意見をいただきました。

扇谷勉さんからは・・・

江利チエミの「テネシーワルツ」の曲が流れる中で話が始まりました。

・・・十二年前に担当した「ときめき夢ランド」という番組の中で江利チエミの特集をした。そのときに使ったのがこの曲で、当時NHKの中にSPレコードで保存されていた。しかし、その後このSPレコードが行方不明になり、また発売元のキングレコードでも保存されていないことがわかると、貴重な情報が保存されていない実態に疑問を持ち始めた。

今では、日本レコード協会やNHKなど六団体が「歴史的音盤アーカイブ推進協議会」をつくり音楽情報の保存に力を入れ始め、NHK内部においてもアーカイブの必要性が真剣に議論され、資料保

存に対する取り組みが始まっている。また私自身もドキュメンタリー番組を作成するときに古い文献を活用することが多く、多摩地域の共同保存図書館構想を全国の人に知ってもらいたいという思いから、今回の放送となった。

千代正明さんからは・・・

「多摩の共同保存図書館への期待」という内容で話が始まりました。

・・・公共図書館の蔵書構成というのは、住民のニーズと地域社会の状況の反映であり、常に新陳代謝が行われるべきである。所蔵資料の廃棄・除籍理由は、資料の破損とスペース不足であり、スペース不足の問題を解決させる一つの方法が共同保存図書館である。先進事例としては、滋賀県立図書館の活動がある。

また、国立国会図書館関西館準備室長だったときに、国立図書館を中心にした共同保存図書館構想を考えたことがある。全国の図書館で廃棄した資料で関西館にない資料を集めるといふ構想であったが、時期尚早で実現しなかった。

多摩地域の共同保存図書館の事業は、時代の追い風に乗っている。世の中の（もったいない）思想や地方分権、道州制構想、あるいは広域行政への見直しという追い風がある。少子化による遊休施設の増加や高齢化によるボランティア活動への参加者の増加という追い風もある。今がチャンスであろう。

しかし、本来、この事業は都立図書館が行う事業であり、あくまでも都立図書館の役割を追求することを怠ってはならない。共同保存図書館維持

のための費用等に対する各図書館の協力体制の確立や分担収集も含めた相互協力システムの強化も必要である。

清田義昭さんからは・・・

現在の出版事情の分析から話が始まりました。

・・・出版業界は、ここ十年マイナス成長であるが、出版点数については逆に右肩あがり年間8万点を超えている。出版点数が増えると同時に返本率も高くなる。出版社は税金対策から在庫を長く抱えられない。したがって本のライフサイクルが短くなり、絶版、品切れになる比率も高くなっている。出版とは時代を表すものであり、その時代の文化そのものを反映しているが、その出版物が残りにくい時代状況に危惧をおぼえる。また、多摩地域の図書館でも

多くの出版物が廃棄されていることを聞き、それを残す環境をつくっていく必要性を感じた。その意味で共同保存図書館をつくる意義は大きい。

最後に、今の電子化状況の中で、紙かデジタルかの二者択一が求められることがある。

「出版ニュース」を紙で保存する必要はないという意見も聞くが、これは二者択一ではなく紙もデジタルも残していくことが必要である。



討論の中では・・・

扇谷さんからは、共同保存図書館の実現に向けて国や都がもっと真剣に考え、予算面での援助も積極的に行うべき

という主張がされました。

千代さんからは、共同保存図書館を実現するには、東京都も含めた各自治体の協力と、広域的な運営が不可欠であり、自治体を動かすのは市民の力なので、その力が重要であるという見解が示されました。

清田さんからは、図書館が市民や文芸家にとっては大変重要な機能を果たしているという認識をもっと共有すべきであり、利用者・文芸家・図書館員が丸となって自治体に共同保存図書館の必要性を訴えていくことも必要であるという意見が述べられました。参加者は37名でしたが、パネルディスカシヨンのあと、懇親会のビア&ピーナツの会を行い、参加者それぞれが懇親を深めました。

（斎藤誠一）

こんな記事がありました

6月17日付『読売新聞』（大阪）北摂版に興味深い記事が掲載されたので紹介します。

国分一也

武蔵村山市立図書館

新聞見出し「図書貸し出し拒否 熊取町側が敗訴 5万円支払い命令」

●大阪府熊取町立熊取図書館は蔵書の入替えに伴い、03年度までの四年間に約5万6千冊の本を廃棄した。●同町の男性（64）がその数が多いとして05年7月に廃棄した本の内容を調べるため、うち37冊をリクエストした。●同館は他館から取り寄せて提供したが、「今後は未所蔵の資料を他館から取り寄せての対応

はしない」と男性に通告。●

男性は同年8月に再び19冊をリクエストしたが、同館は「業務に支障が出る」という理由で拒否した。●男性は精神的苦痛を受けたとして10万円の損害賠償を求め大阪地裁に提訴した。●判決は、「拒否に正当な理由は認められない」「公立図書館は公的な場、正当な理由なく貸出しを拒否するのは人格権の侵害」と町に5万円の支払いを命じた。●これに対し町は、「処分された本ばかり申し込まれるのは、本来の制度にそぐわない」として控訴する方針。

〈感想〉

船橋市立図書館で01年に大量の蔵書廃棄をめぐる著者たちが訴え、裁判となったことをご存知の方も多いと思います。今回は更に進んで、廃

棄した本が妥当だったかをリクエストして確かめようとした利用者が司法に訴えたものです。地裁レベルとはいえ町側全面敗訴となっています。

同町は町立図書館では全国でも五指に入る蔵書数（約34万冊）と貸出冊数（約56万冊）を誇る活動をしています。●予約は約8200件（うち他館借用は約千冊）●日本の図書館2005』より）と意外に少ない感じがします。ほぼ単館に近い（BMあり）ためと、蔵書がある程度充実しているという傾向となるのかもかもしれません。正規10名非常勤8名の職員で運営している、職員の立場から見ると案件的にはきつそうで、手間のかかる借用は確かに大変だ（大阪府では市町村間で貸借する資料は、府立図書館の連絡車に乗せられない！）と思

われます。ただし熊取町側の言い分は、この記事以上には確認していません。

もし私の職場でこのような要求が出たらどうしたでしょうか？本をどのような目的で利用するかに関わらず、本件のような理由では断れないので受付10件以内（当市が一度に受けるリクエストの制限冊数）の範囲で淡々と処理することでしょう。

しかし、書架が飽和状態で購入と同量を廃棄せざるを得ない現状では、こういう要求がいつ出てもおかしくない状況です。資料の廃棄は今後ますます慎重にせざるを得ないと感じた記事でした。



第58回北日本図書館大会・福島県図書館研究集会に参加して

座間直壯（理事長）

大会は「図書館からはじめよう、地域との新しい連携をめざして」というテーマで6

月14日と15日に福島市（ホテル福島グリーンパレス）で開催されました。参加者は総数220名。第一分科会104人、第二分科会57人ほどの集会です。初日は全体会で、前鳥取県立図書館長の齊藤明彦氏の基調講演と矢祭町もつたいない図書館長の齊藤守保氏の事例報告があり、二日目は二つの分科会で事例発表と討議です。

私は、「図書館の新しい動き―地域からの情報発信」をテ

ーマとした第二分科会に「NPO共同保存図書館・多摩」の代表として参加し、「共同保存図書館への挑戦」収容能力を超えた市町村立図書館の資料保存対策」と題して事例発表。今一つは「夜からはじまるふしぎの図書館」と題した前仙台市宮城野図書館長の岩澤克輔氏でした。

私は、最初に多摩地区の図書館が60年代後半から80年代にかけて成長する過程での、貸出を中心とした徹底した資料提供と図書館システム作り、日常生活の中に図書館が根付き、その存在は確実に拡大したことを紹介しました。

そして都立図書館との関係の過去と現在、資料保存に関する多摩地区の現状を説明。次に「共同保存図書館構想」の経過や会の発足、現況について説明し、多摩の市長会の

動きや図書館長協議会の取り組みなどを紹介しました。

最後に今後の展望として、都立図書館が本来の役割を果たす中で、市民活動と地域の図書館が手を結び「図書館がやるべきこと」「市民レベルで出来ること」をしっかりと認識し、三者の共同作業を通して図書館活動の前進を支援していきたいと述べて発表は終わりました。

助言者として富士大学の齊藤文男教授がおられ、元都立図書館の職員としては何とも居心地の悪さを感じるが、都道府県立図書館の機能を肩代りする形のみが全国に広まることは好ましくない。本来、都道府県立図書館が第二線図書館としてしっかりとその役目を果たした上で進められることが望ましいと考える、と助言をいただきました。

分科会終了後、ある市立図書館長さんが話しかけてこられ「実は資料の保存で困っている。共同保存システムを早く完成させてほしい。」「しかし図書館相互の横の連携が殆どないので、話を聞いていて、よくそんな連携が出来るものだ」と感心していました。

確かに東京は地の利がよくて皆が集まりやすく、設立形態や時期等が似ていて連帯意識が強いことも事実だと思いました。そういう意味から共同保存のモデルとして何とか形にしていかねばと改めて痛感した次第です。



パネリスト体験記

吉田 徹 (理事)

さる6月11日から二週間にわたって「平成19年度図書館司書専門講座」(主催・文部科学省、国立教育政策研究所)が開催され、その最終日(6月22日)に行われた、「図書館のこれからを考える」と題したパネルディスカッションに参加した。

パネリストは、慶応義塾大学教授(前鳥取県知事)片山善博氏、(株)図書館流通センター営業企画事業部長佐藤達生氏、NPO共同保存図書館・多摩理事の吉田徹、コーディネーターは筑波大学教授の葉袋秀樹氏である。

パネルディスカッションは、あらかじめ、1. 図書館の今

日的意義・役割、2. 図書館政策・経営のあり方、3. 図書館職員への期待という三つの論点が示されており、その内容で話が進められた。

紙面の関係で詳細に報告はできないが、図書館は、厳しい現代を生き抜く市民の自立を、さまざまな側面から支える必要があることがいろいろな角度から話され、熱のこもった討議であったと思う。他のパネリストからは、古今東西の智の蓄積場としての図書館の役割、あるいは現代の情報集積機関としての図書館などの話が出された。これを受け、私からは、図書館の資料保存機能が大きな問題を抱えている現在、「多摩デポ」は「共同保存、共同利用」という新しい課題に挑戦しようとしていることを訴えてきた。

参加者とパネリストとのや

り取りの時間がなく、一方的な話しかけに終わってしまったことが残念だった。

全国図書館大会 資料保存分科会で報告予定!

今年の図書館大会は東京です。10月30日に行われる分科会に呼ばれました。

「年々増え続ける図書館資料をどのように残していけばいいのか。全国の多くの図書館が頭を抱えている深刻な問題である。(中略)最近、そういった問題を解決すべく、地域レベルで様々な形態の取り組みが試み始められている。それらの試みを紹介したい。」という趣旨で「多摩デポ」からも報告を、という依頼です。

座間理事長、斎藤事務局長とも他の分科会に出番があり、

田中ヒロ(理事・事務局)が担当します。全国図書館大会では05年の同分科会で、「多摩むすび」から当時の状況を報告していますが、NPOとして動き始めて以降の動きと現状について報告する予定です。

再度、会費納入のお願い

前号で会費納入のお願いをしました。(ニュース到着直後にすぐ一件の振込があり、感激でした。)2006年9月までの入会の方(会員番号 06-011-XXXX)が、更新対象です。既に7割以上の方が納入されましたが、まだの方どうぞよろしくお願いいたします。10月以降入会の方(会員番号 06-021-XXXX)は、10月更新ですので、次号に振込用紙を同封します。